



発行所： 保育総合研究会事務局 平成23年7月  
茨城県東茨城郡茨城町上飯沼1276-1 飯沼保育園内  
TEL029-292-6868 FAX 029-292-3831  
発行人： 会長 梶沢幸苗

平成23年6月27日(月)午前10時から函館市勤労者総合福祉センターにおいて、サポートブックⅡ研修会(in函館)および午後1時より第37回定例会が行われた。

## サポートブックⅡ研修会

<テーマ> 「保育の計画実践から評価まで」

講師 当会会長 梶沢幸苗氏



保育園は園児が入所している間、安定した生活が送れる養護と、充実した活動ができる教育からなっている。養護を基盤として教育があるが、養護の中の教育的側面、教育の中の養護的側面を発達に応じて捉え保育することが必要であり、保育士は心情・意欲・態度の発達援助をし、これらが計画的に反映されていることを確認することが求められる。

保育計画作成の目的は、保育の目的、ねらいを達成するためのいわば地図を作ることであり、計画を作成するうえでの留意点は対象乳幼児の発達の段階を把握し、最終到着点を見失わずに作成されているか、保育に必要な環境構成が



見えているか、保育計画、子どもの育ち、保育の内容に連続性や継続性があるかであり、保育指針のねらいを理解し、園児の発達過程を把握、指導計画を作成それを実践、育ちの省察、保育の評価、評価に基づく改善を行うことが保育の質の向上になる。

## 食育計画の考え方と作り方

<テーマ> 「子どもの食を通じた育ちを理解する」

講師 東京家政学院大学 酒井治子氏



### 1. 食を通して子どもの育ちへの理解を深めよう

保育所の食とは、食べ物の量を満たすだけではなく教育の一環でもありケアの一部でもある。食育を計画的に行うために、食育の指針がH16年3月にできました。その後第一次食育基本法ができ、5年後のH23年3月に、バージョンアップされた第2次食育推進基本計画が、内閣府より出されました。新しい内容として、調理室という物的環境と人的環境が共に有り、ゆたかな資源のある保育所が在宅の子育て家庭からの乳幼児に対する食に関する相談や情報提供に努めるようになりました。このように食の環境(調理室)が大切だと言われてはいますが、基本計画策定時に保育環境に配慮とはあるが調理室とは文章化されなかった。

子どもの姿は、乳汁から離乳食そして手づかみ食べへと受身ではなく一歩一歩育っていきます。食べることは、物を食べるだけではなく人との関わりも食べています。そこには食具(箸・スプーン)があります。それが使えないため、指導を受けるということからも人との繋がりがあります。つまり食具という二本の箸から広がっていく、人との関わり・食への発見・食の探索に発展していきます。そのためには計画が必要になります。



### 2. 保育所で食育の計画づくりのあり方を探ってみよう

食育の計画は、全スタッフで話し合うことが大切です。なぜならば食育は健康の基礎を養うことであるため、計画だけが切り離されてはいけません。いわばクッキング等の行事を追うだけではなく、またスキル習得だけにならず通常の保育の中で計画しどのような体験を積み上げていくか重要になります。さらに年齢による食の場面のねらいが必要です。

### 3. 乳幼児に積み重ねたい「食に関わる体験」とはどのようなものであろうか、事例から考えてみよう

食べていない時間をどう過ごすかが重要になります。家庭では、保育所のように遊び切れません。だから、おなかがすくと言う事が生活の中で保障されているのは、保育所ならではの事です。おやつを楽しむために、お昼寝から起きて30分間外遊びをしておなかのすくリズムをつくる工夫をしているところがあります。

食事後、お友達が食べ終わるまで少し静かにして待つことは、道徳性の芽生えに繋がっていきます。食材を育てることは、命の尊さや自分の体をつくる自然環境につなげていくことでもあります。



### 4. 具体的な実践に向けてのポイントをおさえよう

保育所は安定した行動の繰り返しができる場所です。子どもたちは、繰り返し行動されていくことで価値観や意味づけが蓄積され可視化されていきます。野菜をなぜ食べなければならないかの前に給食に野菜が入っていて、子どもたちが主体的な生活や遊びの中から気付いていきます。

つまり、食育は心でどう感じるかという心情と、やろうとする意欲、心がまえとしての態度のねらいがあることが大切です。学びの連続性を担保するためにも別立てにならないように配慮してください。食を通し、心動かされる体験の積み重なっていくことが大切です。





## シンポジウム



<テーマ>  
シンポジスト

「食育の重要性」  
東京家政学院大学准教授  
保育総合研究会会長  
社会福祉法人函館共愛会  
保育総合研究会副会長

酒井 治子 氏  
梶沢 幸苗 氏  
西出 房子 氏  
坂崎 隆浩 氏

コーディネーター

[坂崎] それではまず、さきほどの酒井先生の話聞き、何を感じましたか。

[梶沢] 食育は、保育の領域すべてに関わってくると改めて感じました。お腹がすくという体験が出来ているのか、フードマイレージ(赤ちゃんは母乳だから0)、0の距離感をどうやって感じさせたいのか。日々の保育の中に組み込んでいくのか考えさせられました。

[西出] 自分の子どもを育てたことを思い出します。冷凍食品を使わなかったのは、自分の生き方を見せたかっただけかもしれない。でも、食べることは大事なことでとしみじみ感じた。食育計画はやっていた。ぶつぎりであった。5領域に関わっていくのは、これからだと感じました。

[梶沢] 食が人を作るのは確かである。好きなものだけ食べていては違った性格になってくるので、食は人の心も作っていく重要なものなのに、これを誰かに任せていいのでしょうか。(外部搬入) これからの指針には、食育がはずされている。国は小手先で働いていて、子どもの存在を考えていない。給食の味はあきないが、外食は同じ味であきてくる。外部搬入に関しては心配しています。

[酒井] 食育に関するガイドラインは、外部搬入を選択肢のひとつにしている。外部搬入があつて当然のガイドラインとなっている。7月中に骨格を作ることになっているが、今までよかれと思っていなかったことを担保にしなければならず、今までやってきた保育所給食のメリットを示しておかなければいけません。自園給食は、何がよいのかきちんと示さなければなりません。

[坂崎] 現実には、外部搬入反対の方向には進んでいかないでしょう。削るところがある項目である給食は、保育界としては危機的状況にあると思います。

[梶沢] 給食室撤廃を反対してもそうはいかないのであれば、自園の給食がなぜいいのか、たくさん例をあげて、それでも外部搬入するのですかと言っていくことが大事だと思います。

[坂崎] 質の改善の中に食に関することがいっさいないのが現実です。

[梶沢] 自園給食を特別事業にしてくれないのでしょうか。

[酒井] 自園給食のよさを緊急に説明していかなければならない。

[西出] 平成16年、食の大切さを認めたはずなのに、なぜこのようなことになるのでしょうか。

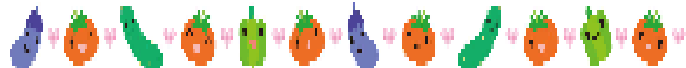
[坂崎] 仕組みが7月6日前後に決まるとのことです。決まったこととして、外部搬入を言うのでしょうか。

[酒井] 大学の教授達を集めて、現場の人たちの話を聞かないのは、どうしたものかと思いません。

[梶沢] 児童福祉法からはずれるのでしょうか。

[坂崎] 総合施設になっても、児童福祉法からははずれません。外部搬入をしないと企業や幼稚園が参入できなくなる。給食も違う考え方になるということでしょう。

[酒井] 公的にお金を出しにくくなるので、がんばる企業に考えてもらわなければいけなくなるのでしょうか。



[坂崎] 新システムの話をしていただきます。平成23年度にシステムの提案をし、来年の3月、子ども指針をひとつにして平成25年4月から新しい仕組みになります。7,000億円の内の4,000億円は量の拡大、3,000億円が質の改善となります。3才児の基準が20:1から15:1になるようである。幼稚園を残した保育制度改革。保育所が違う時代に引き込まれていくということなのでしょう。

それでは話しはつきませんが、皆様に最後一言語っていただきます。

[梶沢] 例えば、なぜ野菜を食べるのかを保育士が園児に話す時、外部搬入では伝えにくくなります。子どもの5感を育てるのに給食の食がどれほど大切なのか。子ども自身を見て、政策を考えていない。子どもの代弁者として発言していくことが必要である。

[西出] 食べることは健康に生きることにつながる。食は大切であり、人間づくりにもつながる。誰のために食育があるのか。保育所から給食がなくなるのは大変なことです。

[酒井] 少しでも一緒に考える人がいることが大切です。きちんとした経過と対応を残していけるよう記録が必要だと感じました。

[坂崎] それでは、シンポジウムをこれで終了いたします。



## 乳幼児期の「保育所保育の必要性」に関する研究 第1回会議



6月28日、函館共愛会、本部会議室において、保育科学研究第1委員会会議(0歳からの保育所における教育について)と保育科学研究第2委員会会議(小学校との接続連携について)の第1回会議が行われた。

函館共愛会の皆様、会議室を貸していただきありがとうございました。

函館の海の幸を食べ、函館の皆様の暖かさに触れることができた研修でした。

